



こうざいひろあき 香西宏昭選手プロフィール

香西さんは、1988年に神奈川県で産声を上げた。生まれた時からひざから下がなかった。勉強よりも体を動かすことが好きで、小学校の休み時間には野球やドッジボールをして遊び、特に野球が好きな元気な少年であったという。12歳のときに地元で開かれる車いすバスケットボールの体験会のチラシを見て、父に連れられて参加する。これが、車いすバスケットボールとの出会いである。初めて乗った競技用車いすは、いつも自分が使っている車いすとは全く異なり、操作が楽しく、スポーツ好きな香西さんは車いすバスケットボールの魅力に引きこまれていった。その後、大人の名門チーム「千葉ホークス」からの誘いもあり、本格的に車いすバスケットボールを始めるようになった。12歳の香西さんは、最初は怖いながらも20代、30代の大人のチームで練習をするようになり、大人たちから刺激を受けるうちに練習に熱が入るようになっていった。そのうち登校前の朝練をするようになり、腹筋などの筋カトレーニングなどで体づくりをしていった。

中学生のとき、香西さんの進路に大きな影響を与えた出来事があった。アメリカのイリノイ大学車いすバスケットボール部の当時のヘッドコーチであるマイク・フログリー氏の指導を受ける機会を得たのである。フログリー氏は当時、世界一のコーチと言われ、指導を受けた香西さんは、ますます車いすバスケットボールが好きになっていった。

中学時代、香西さんはフログリーコーチから「アメリカにおいでよ。そして、世界のトッププレーヤーになろう！」という主旨の誘いを受け、イリノイ大学に行って、フログリーコーチからもっと学びたいと思うようになった。そして、時とともに、「もっとうまくなりたい」、「世界で認められる選手になりたい」という思いが抑えきれなくなっていった。しかし、香西さんは渡米してすぐにイリノイ大学に入るのではなく、編入試験に合格するまでは近くの学校で学びながら合格を目指すことになっていた。イリノイ大学に入るまでは大学の車いすバスケットボールチームに正式に入ることは許されず、練習生としての参加が認められているだけなのだ。加えて、渡米後の自分の生活はどうなるのだろうか、言葉は通じるのか、一人でやっていけるのかなど、大きな不安も捨てきれなかった。そして、自身の葛藤のなかで何度も何度も親やコーチと将来について話し合った。

高校2年生のとき、香西さんはついにイリノイ大学に入学するために、一人でアメリカに行くことを決意。しかし、卒業後、いざ世界へ羽ばたこうとしても不安がよぎり、出発の直前に行くのが嫌になり、大泣きしたのも事実。

2007年に渡米すると、買い物や料理など慣れない一人暮らしに奮闘。そして、2年半の間、イリノイ大学に入るための本格的な勉強をするが、すべて英語で進める勉強は香西さんにとって大きな壁となった。それでも懸命に努力を続け、2010年1月、イリノイ大学に合格。その間、「Hiro」と呼んでくれる同年代の友達もたくさんできた。大学では、フログリーコーチの教えである「学業が中途半端だとバスケットボールも中途半端になる」「一歩ずつ確実にステップを登ることが大切」という言葉を信じ、勉強とバスケットボールを両立させていった。朝練が終わると、ハードな練習の影響でふるえる手で勉強した日もあった。そんな日々の努力の結果、チームではキャプテンを任されるまでになり、全米大学選手権の年間MVPを2年連続で受賞。大学を卒業後、2013年にはドイツ・ブンデスリーガのプロの車いすバスケットボールの選手となる。

「もっとうまくなりたい」、「世界で認められる選手になりたい」という思いを持ち続け、パラリンピックの北京・ロンドン・リオと3大会に連続出場した香西さんは、東京パラリンピックの車いすバスケットボールチームの主力として、チームを引っ張る存在にまで成長した。

年 組 名前

■ こうざいひろあき香西宏昭選手の映像やプロフィールから、インスピレーションを受けたこと（心を揺さぶられたことや、しげき刺激を受けたこと）を書こう。

・まねしたいこと ・見習いたいこと ・すごいと感じたこと など



年 組 名前

こうざい 香西選手の姿を見て自分を振り返ろう。

■ 自分にとって「勇気」「強い意志」を持って成しとげたいこと（目標）とは

【香西選手の例】

- ・もっとうまくなること
- ・世界で認められる選手になること

■ 自分の目標達成の前に立ちはだかるハードルとは

【香西選手の例】

- ・アメリカの大学への入学
- ・アメリカでの一人暮らし
- ・入学後の学業成績維持

■ ハードルを越えるために、何をしたらよいだろう？

今まで実行してこなかったアプローチを考えよう。（具体的な行動で考える）

【香西選手の例】

- ・毎日、英語の単語を 10 個ずつ覚えていった。
- ・掃除や洗濯など、自分でできることを増やしていった。
- ・日々の学習課題は、その日のうちに終わらせる。